Midgard

AAX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｄｇａｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ５８０６Ｗ

【作者名】
ＡＡＸ

【あらすじ】
２０３８年、夏。大人気ＶＲＭＭＯ『Ｗａｌｈａｌｌａ』の製作チームが「超・リアル」を謳い文句に、グラフィックの向上、システムの大幅な改定、レベルキャップの廃止などを盛り込んだＶＲＭＭＯ『Ｍｉｄｇａｒｄ』をリリースした。Ｍｉｄｇａｒｄは前作を上回る評判となったが、ある日、Ｍｉｄｇａｒｄで遊んでいた全てのプレイヤーがゲームに閉じ込められる事件が発生した。プレイヤーたちはそれぞれの力を尽くして問題の解決をはかる。

手帳（前書き）

本作品はゆきあたりばったり至上主義でお送りします。

手帳

２０３６．１１．９　ＡＭ　７：４２

織田から連絡が入った。
遂に遺跡の発掘作業が完了したとのこと。
作業が開始されてからはや六年……。感無量。

同日　ＰＭ　２：１６

ドライバーに起こされる。
到着したらしい。
手が震えてバン車のドアを開けられなかった。
まさかこれほどまで感情が高ぶるとは。

同日　ＰＭ　３：２３

どういうことだ。
なあ、お前は建造物を掘り起こしていたんだよな。
六年間。俺の出資で。
あれはなんだ。あの黒い物体は何なんだ。
あれは断じて古代の建造物などではない。
あれはまるで……

同日　ＰＭ　７：３８

結局、織田は直方体を持ち帰ってしまった。
織田との口論が原因で現場の雰囲気が最悪になり、また、日が暮れたというので今日はお開きになった。
あいつは後日大学の研究所に引き渡すと言ったが嘘だろう。
流石に映画や小説のような事にはならないだろうが……。
平穏裡に解析が完了することを祈る。

はじめてのフィールドが草原って多いよね

「いつもよりすごくね？」

草原に座り込んで頭を抱え、苦悶の淵に沈みこんでいる俺の隣で、隼斗の野郎が踊り狂っている。一体全体、こいつの精神はどうなってやがる。

「うはっ！　その辺の草引っこ抜けた！　やべぇ！　ゲキマズ！　やべぇ！」

雑草喰ってんじゃねえよ。汚ねぇからその辺に吐くな……って、コラ、なに他人に喰わせようとしてんだ！

俺は慌てて立ち上がり、漆黒の甲冑を纏った大男の腰ベルトを引っ掴んだ。甲冑の大男――つまり鈴木隼斗（すずきはやと）は、不意に重心をずらされ、うえ？　と、とぼけた声を上げて転倒した。

ここ、ヴァルト草原には俺達を含めて２２人のＰＣ（プレイヤーキャラ）が閉じ込められている。表現の違いこそあれ、ＰＣたちは全員、現実世界に戻れなくなったことに愕然とし、打ちのめされている。

……このバカ以外は。

「お前、この状況分かってんのか？」

「俺だって流石にそこまでＫ・Ｙじゃないぜ。みんな、リアルすぎて度肝抜かれちまってんだろ？」

「このドアホ！　ゲームからログアウト出来なくなって絶望してんだよ！」

「うぇ！　まじ！？」

本当に気が付いていなかったらしい。隼斗は慌てて顔や腰に手を当てた。脳天気というか、なんというか……

とはいえ、致命的なまでに楽観的な性格をしている隼斗も、この事実はこたえたようだ。はち切れんばかりの笑顔を作っていた奴の顔は、フッと蒼白になり、みるみるうちに萎んで……萎んで……あれ？

「イィヤッホォォォォォォオゥ！！　遂に！　遂にィ！！　人類は成し遂げたァ！！　さようなら三次元！　んでもって、ウェルカァァァァム二次元！！！」

駄目だ……こいつ……。

一瞬、文字通り顔色を失った隼斗は、次の瞬間、雨乞いでもするかのように両腕を振り上げ、全身を震わせながら獅子の咆吼にも劣らないシャウトをヴァルト草原じゅうに轟かせた。まわりのＰＣがこちらをふり向く。隼斗のＰＣは図体が大きいうえに真っ黒なのでよく目立つ。

隼斗は腕を天に突き出したまま微動だにしない。立ち尽くしていたＰＣは、奴の咆吼にわけの分からん救いを見出したのか、ゾンビのような足取りでこちらに近付いてくる。かなり怖い。

このままでは連中に押し潰されてしまう。一刻も早く逃げなければ。

しかし、呼べど叫べど隼斗は息を吹き返さない。背中を思い切り蹴りつけてみたが、ぐわあんという低い金属音が鳴っただけだ。ちくしょう。

結局、俺達はゾンビに囲まれてしまった。

やたら伏線っぽい描写があるが大丈夫か

こいつらには自意識ってもんが無いのか？
群がり、餌をねだる池の鯉のように口をあんぐりと開けたＰＣどもを見渡す。いかにも冒険者らしい土臭い風貌のうえで、色とりどりの瞳だけがきらきらと輝いている。濡れたビー玉だ。

「それじゃあ、一旦ラインに戻るってことでいいですね」

鯉どもは首を小刻みに上下させる。お前らには声帯すら無いのか？　コダマの親族か何かか？
連中のなかにはまともにこっちを見ようとしない奴もいる。一挙手一投足があいつらを連想させて、嫌になる。うざってえ。
……そういや隼斗が静かだな。
後ろを向く。が、誰も居ない。
ふと閃き、首の傾度を少し深める。いた。

「遊んでないで少しは手伝えよ」
「こーいうのはルナだけでやったほうがスムーズにいくっしょ。俺なりの配慮なのだ」
「誰がルナだ。ふつうに聡（さとる）って呼べよ」
「ええー」
「いや、えーじゃなくて」
「そいつぁムリってもんですぜ、姉貴」
「俺はお前の母親じゃねぇよ」
「なら妹？」
「アホ。それを言うなら弟だろ」
「ええ？」
「いや、ええじゃなくて」

ちょうど俺の真後ろ辺りで、隼斗はゾンビの1匹と話し合っていた。
服装から察するに、相手はゲームを初めて間もない初心者だろう。初期装備で身を包んでいる初心者は、全長2m近くもある隼斗の姿に畏縮しきっている。
そういや初期装備の奴がやけに多いな。ざっと見渡しても5人はいる。
俺はふと思い立ち、叫んだ。

「Midgardの操作をまだよく分かっていない人！」

蔓のように、あちこちでそろそろくねくねと手があがる。1、2、3……14人。
思った通り。ここに居る奴らの大半は初心者だ。

「それじゃあ、二ヶ月以上やってる人！」

今度はいくらか自信ありげに手があがった。4人。残りの2人は初心者以上中級者未満ってところか。
別に適当でも良かったが、20人の能力を鑑みながら隊列を作ることにした。先鋒と殿(しんがり)をそれぞれ俺と隼斗がつとめる。列の中央やや前方よりに戦闘経験が無いPC4人を男女ごと2人ずつの2列にして置き、両脇を6人の中級者で囲ませる。残りの10人は俺の独断と偏見をもって戦闘に慣れている組、慣れていない組の2組に分け、前者を中央より前、後者を中央より後ろに置いた。この編成ならおそらく街までは安全に行けるはず。初心者を最前列に並ばせて戦闘に慣れさせるというのも思い付いたが、万が一死んだ場合どうなるのか不明だったのでやめた。状況次第では殺人の片棒を担いだことにもなりかねない。この歳にして前科者、なんてのは絶対に嫌

だ。
陣形は滞りなく完成した。不平を口にする者は居なかった。
初心者はまだ怯えている。妙なことに巻き込まれて心細いのは分からないでもないが、あの瞳や仕草を見てるとやっぱり腹が立つ。
こんな時はちゃっちゃと働いてさっさと終わらせるに限る。俺は列の先頭を陣取った。

「恐いからって、勝手に1人で逃げ出したりしないように。この辺に出没するゴブリンは群れからはぐれた個体を襲う習性があるから」

命令したって逃げやしないとは思うが、念のため釘を刺しておく。
石橋は叩いて渡れだ。

一番いい風呂敷包みを頼む

それは唐突だった。

軽自動車が二台は楽に併走できる程度の幅を持った林道の真ん中で立ち止まった。

瞬間、背中に衝撃が走る。裸足で蛙を踏み潰したような悲鳴が上がった。

当然だ。

踵を軸にして反転する。親に縋るヒヨコの列が続いている。俺の手前には額を押さえてうずくまる影がひとつ。

年の頃は十二、三。丈長の黒いローブを羽織っている。典型的な魔術師系のＰＣだ。赤や白や黄色などの派手な色が主流であるのに対して、彼女の髪は濡れた土のような焦げ茶色をしている。

華奢な指の間から顔が見えている。

たれ気味の、くるりと大きい二重の瞳。小さいながらしゃんと胸を張っている鼻。団子を食うのに難儀しそうな口。彼女の顔のパーツはどこをとっても一級品だ。

当然だ。

Ｍｉｄｇａｒｄはゲームだ。他のＭＭＯの例に漏れず、キャラクターの容姿は自由にカスタマイズできる。特にＭｉｄｇａｒｄは自由度が高く、ミリ単位でキャラクターの造形に手を加えられる。だから当然、本来の俺たちとはかけ離れた姿のキャラクターも作れる。例えば、少年が筋骨隆々の男になってみたり、女が可憐な少女になってみたり。

……少年が少女になってみたり。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」

絶叫。

そうだ。

忘れていた。

せめて奴が姉貴と言ったときに気が付くべきだった。

俺は俺じゃない。

俺は――

「ルナッ！　どうした！？」

隼斗が駆け寄ってくる。

「……何でもない。大丈夫」

隼斗は周囲を何度も見渡している。敵に襲われたと思っているようだ。しばらく森の奥を睨み、ふいと顔を逸らした。

「なら、いいや。ルナが叫ぶなんて珍しいからさ」

「本当になんでもない。ちょっとしたことだよ。あとひとつ、頼みたいことがあるんだけれど」

「なに？」

黒太子エドワード。歴史から抜け出した英雄がこちらを向く。

「俺とエドのポディション、交換してくんない？」

「おーけー」

隼斗は返す言葉で了承した。

女。

俺は女。

ふらふらとよろめきながら最後尾に付いた。それこそファンタジーな現実に呆然自失する。

これ、お湯かけたら元にもどっかな。

主役交代

ルナが沈黙してしまったのでおれが代筆をつとめます。よろしく。つっても、おれ文章書くの得意じゃないんだよな。どうしよっかな。やべー。

おれたちはいま森の中を歩いている。ここを抜けるとラインに到着する。ラインの特徴は大きな壁に囲まれてること。そこそこでかい街だ。

ラインの壁でなんかあった気がするけど忘れたので省略。さっきからぜんぜん敵が出てこないなと思ってたらヤブからゴブリンが二匹出てきた。緑色の体をしていて、鹿か何かの毛皮を腰に巻いている。冒険者二十人を相手に戦闘をしかけるなんて勇敢なやつらだ。立場が違えばヒーローになっていただろう。

武器を召還する。武器は出てこいと念じると出てくる。脳波でどうたらっていう仕組みらしい。でもそれはＭｉｄｇａｒｄがゲームだった頃の話だから、今は違うのかもしれない。じゃあどうして今でも同じやり方で武器出せんのって聞かれてもおれは知らない。出せるから出せるのだ。

おれの武器は黒槍グングニルという名前だ。だが、これはただのランスなので投げても何も起こらない。というか製作費をかなりケチってるので使うたびにどこかが欠ける。ルナにはよく名前負けしていると笑われる。おれもそう思う。噂じゃ本物のグングニルもこの世界のどこかにあるらしい。

ルナで思い出したけど、あいつは普段別のＰＣで遊んでいる。『銀眼のレックス』っていう中二病全開のキャラだ。本人の前では言えないけど、おれはむしろルナがそっちの姿になってなくてほっとしている。あいつ性格キツいとこあるから、あのレックスの姿でなじられたらちょっと立ち直れそうにない。その点ルナだったら安心

だ。どうして安心なのかは聞かないでほしい。
ゴブリンは戸惑っている。そりゃそうだ。どう考えたってゴブリンに勝ち目なんてあるわけない。ランスを野球のようにぶん回す。ゴブリンは木よりも高く吹っ飛んだ。
ゴブリンは二匹ともひょこひょこと逃げていく。道に棍棒と小銭が落ちている。なんかもったいないので拾って後ろの人にあげた。

それから先はぜんぜん何も起こらなかった。狼くらいなら出てくるかなと思ったけど、ゲームのようにはいかないみたいだ。まあ、こんな大所帯の中に突っ込んでったら死ぬだけだもんな。
暇だから後ろにいる女の子と話をしながら歩いた。ルナにぶつかった子だ。名前はミリィっていうらしい。まだ始めてから三日しか経っていなくて、不安でたまらないと言われた。
ミリィの話が本当かどうかはわからない。おれはこんな流れで一度痛い目にあっている。相棒のグングニルが悲しいことになっているのもそれが原因だ。原因ってのはなにかって。もちろん詐欺だ。ルナが助けてくれなかったらこの黒い甲冑まで失っていたかもしれない。装備品を手始めに、金や素材なんかはあらかた奪われてしまった。ルナにめちゃくちゃ怒られた。可愛いは正義って言いかえしたら殴られた。なんだか新しい世界を見た気がした。
これで、名前を知っている人はミリィ、龍魔（りゅうま）、ベルゼブブの三人になった。龍魔とベルゼブブは男性だ。中二病ってのはやっぱ男子に多いらしい。おれも格好いいのは大好きだ。
あ、思い出した。ラインの城壁は戦争になると自動で動く。ゲームの世界ではなんとかの揺り籠っていうらしい。
そのことをミリィに話したら、すぐに「ドグィ・ナの揺り籠ですね」と説明してくれた。そうだった。老魔術師ドグィ・ナ・ラ・アンダルシア・ベルローグが由来なんだった。ドグィ・ナはけっこう有名な魔術師だったらしく、壁以外にもＭｉｄｇａｒｄの世界のあちこちにその名前を遺している。それから、ミリィはなぜ壁が揺り

籠と言われるようになったかを教えてくれた。他にもラインについてのさまざまな逸話を……って、ちょっと待て。ミリィはなんでそんなにラインに詳しいの？　あれ？　もしかして、おれまた騙されてる？　あれ？

ミリィは物知りだね、と言ったら顔を赤くして俯いてしまった。ああ可愛いなぁ。この顔になら騙されちゃってもいいかなぁ。むしろ騙されたいなぁ。

何か欲しいものはないかたずねてみたら、ミリィはお金が足りないと言った。よしよし。ちょうど洞窟探索で稼いだ金があるぞ。たんまりとくれてやろう。

袋に詰めた金貨をミリィに渡そうとしたら、後頭部を思い切り殴られた。めっちゃいてぇ。これ絶対たんこぶできた。すげぇびりびりする。泣ける痛さだ。

後ろにルナが立っていた。ルナの身長と同じくらいの、魔術に使う杖を構えている。そ、それでおれを殴ったのか。

「いい加減にしろよ」

わお。ルナ、すごい剣幕だ。

「いや、ミ……ミリィがさ……困ってるみたいだったから、つい、さ……」

「お前はまた俺に売り子をやらせるつもりなのか？　それとも今度はビラ配りか？」

「メイド服姿のルナってのも、正直たまらないもんが……」

「よし。火葬な」

「ごめん！　ウソ！　いやウソじゃなけど――」

「ファイア」

杖の先端から炎がほとばしる。わあ。本当に燃やされるみたいだ、

おれ。
炎が顔面に触れた。
姉貴、お達者で……

再び主役交代。説明乙

「ルナさんって意外と優しいんですね」
「それがどうした、泥棒猫」

黒焦げになった隼斗の額に軽量化の呪符を張り付け、太い紐で胴体を縛っていると、ミリィから声をかけられた。

優しい、とミリィが言ったのは、おそらく俺が非正規の呪文を唱えたからだろう。火を起こす呪文は『サラム』が正しい。火精サラマンドラの助力を請う、という程度の意味だ。魔術師は、基本的には神々や精霊の力を借りて魔法を発動させる。

魔力の扱いに慣れると、さっきのように自力でも火を起こせるようになる。が、その威力は弱く、消耗も大きい。

それでも勝手な呪文を唱えたり、地面に適当な魔法陣を描いたりする奴は絶えない。ひとえにロマンである。

「むぅ、イヤミな人ですねー。せっかくミリィが誉めてあげたのに、泥棒呼ばわりするなんてあんまりです」

そう言って、ミリィはぷくりと頬を膨らませた。リアクションが古い。

「じゃあ詐欺師だ」
「そんなのもやーですよ！　ミリィをあだなで呼ぶのなら、ぜひ、恋の錬金術師って呼んでください！」
「分かったよ、カネゴン。……ったく、こんだけの量を稼ぐのに、いったい何日かかったと思ってやがる」
「うーん。三十分くらい？」

俺の独り言をミリィが拾った。
紐から視線を逸らし、正面やや右寄りを睨みあげる。いかにもしとやかそうな少女らしい、屈託のない笑顔がそこにあった。耳に心地よい甘言を弄して人を誑かす悪魔どもは、きっとこんな顔をして人前に姿を現すのだろう。

「……それ、予想だよな？」
「経験則ですぅ」
「おい、物欲怪獣イロジカケ。街に着いたら覚悟しとけよ」
「ミリィには“わいろ”があるから平気だもん」

どうやら、俺は紐で縛る相手を間違えてしまったようだ。

Ｍｉｄｇａｒｄは広大なうえ人口が多いので、運営の手が回らない空間が多い。更に、Ｍｉｄｇａｒｄは「超・リアル」を謳い文句にしているだけあって、ＰＫ（プレイヤーキル）は勿論のこと、戦利品の横取りやスリ、果てには装備品の追い剥ぎなども可能である。というか、そうした犯罪が日常的に横行している。特に愉快犯の初心者狩りは深刻な問題であり、運営を主導に大規模なＰＫ撲滅運動が行われた事もあった。しかし、この運動はゲームの自由度を下げるなどといった理由から猛烈に非難され、結局半月程度で頓挫してしまった。
代わりに運営は「牢獄システム」というものをＭｉｄｇａｒｄに組み込んだ。このシステムは、ＰＫや窃盗などなんらかの悪行を働いたＰＣには「罪人」という隠しスキルを付与し、またその悪行の深刻度に応じて「カルマ値」という隠しパラメーターを振り分け、「罪人」となったＰＣに対しては、ＰＣが溜めた「カルマ値」の１００倍の罰金を要求したうえ、３日間のアカウント停止を喰らわせるといったもの。ＰＣはこの罰を完了すると晴れて「罪人」スキル

を失い、「カルマ値」も０に戻る。アカウント停止をされている間は、ゲーム内では街に新設された「牢獄」に収容されているという設定になっている。

「罪人」は憲兵に追い回される。捕まれば罰を受ける。罰に懲りたＰＣは再犯をしなくなる。これが理想の循環。だが、憲兵に捕まらず、運営の目をかい潜り、それでなお悪行の限りを尽くすＰＣも当然ながら居る。そうした「罪人」どもは、本来はＮＰＣにのみ指名される「賞金首クエスト」の討伐対象に指名されるようになる。この時点で「罪人」のスキルは「悪党」、または「異端者」スキルにグレードアップ？　する。このいずれかのスキルを持ったＰＣは、道具屋や宿屋など、あらゆる街の施設から閉め出され、また他のＰＣにＰＫされても罪に問われなくなる。つまり「悪党」や「異端者」はたとえ殺しても「罪人」にならないのだ。更に「悪党」、「異端者」スキルは、公開処刑または異端審問にかけられて永久アカウント停止処分をされない限り、永遠に払拭されることはない。まるで中近世におけるヨーロッパ社会のような構造だ。

このシステムが採用されてから、確かに強盗や初心者狩りなどの蛮行非行は減少した。だが、代わりに「天下の大悪党を目指す！」と息を巻く大馬鹿者どもが続出した。奴らは己に賭けられた賞金の額に一喜一憂している。

また、どうやってＭｉｄｇａｒｄのプログラムに細工をしたかは知らないが、ある時から教会の片隅に「免罪符」なる品物を販売するシスターが出現するようになった。シスターはその「免罪符」を「カルマ値」の一万倍というとんでもない高値で罪人などに売りつけ、その見返りにカルマ値などのレッテルを全てチャラにする。まあ、さすがに数千万もの大金をポンと差し出せるＰＣはそう多くないが、そうしたＰＣこそ永久アカウント停止を喰らうべき極悪人なので、質が悪い。この問題に関して、運営もたびたび苦言を呈してはいるが、状況の改善には消極的である。今では、あの免罪符システムは運営の自作自演であるという見方がほぼ常識となっている。

実際、免罪符システムはモチベーションの向上やインフレ回避に一役買っている面もあり、一概に悪とは言い切れない。

その「極悪人」のうちの一人が、俺の目の前に居る小娘であることは言うまでもない。

こいつらを憲兵に差し出すと１０万単位で報償を貰える。こいつほどの詐欺師なら４０万はかたい。

……しかし、この世界で“処刑”をされると、現実ではどうなるんだ？　ふと、意識を失ったプレイヤーの首が血しぶきをあげて吹き飛ぶ、という、おぞましい想像が脳裡をかすめた。

まあ、今はこいつにキリキリと働いてもらおう。俺は隼斗を結んだ紐の先端をミリィに突きつけた。

「ほら、持てよ」

ミリィは目をぱちくりさながら気の抜けた声を発した。

「ふぇ？」

「こら、クシャミするなら顔を合わすな。むこう向け」

「んなっ、そんなのじゃないです！」

ミリィは、「ひどい！」、と言って俺の左頬を引っかいてきた。猫パンチ。完全に油断をしていたので避けられない。ミリィの爪が頬の皮を抉る。

「このガキ……」

「れでぃに失礼なことを言うからいけないのです！　ミリィはいまものすごーく怒ってますよ！」

「そうかい。俺は殺意でいっぱいだ」

言うなり、俺はミリィの手をとって紐を巻き付けた。ローブから露出したミリィの右腕は、たちまちボンレスハムのような姿にされた。

「きゃあ！　ミリィの腕がとてもおいしそうなことにぃ！」
「それじゃ、行軍再開だ。アホな寸劇に付き合わせて悪かっ――」
「ぜぇったいに許さないですわ俺女め！　くらえ、乙女キィィックゥ！！」

ミリィが跳び蹴りを仕掛けてきた。
身体の位置をずらして攻撃を避ける。背後から重い物体が引きずられる音が聞こえた。隼斗ごめん。

「世間じゃ、お前みたいにアグレッシブな女はプロレスラーと呼んでいる。勉強になったな」
「あ、あたた……。擦りむいちゃった……」
「……」

空中に豪快なスライディングを決めたミリィは、いま、道の端っこで座り込んでいる。よく見ると、ローブの右肘と右脚の膝から下の部分が濡れている。
傷口にぴた、と手を当てては、慌てて離すの繰り返し。
調子が狂うったらない。
再び杖を召還し、呪文を唱える。『エイラーニャ』。簡易的な治癒魔法だ。
すると、痛みが和らいだらしく、ミリィが立ち上がった。ちょっと泣いている。

「ルナさんって優しいんですね……」
「誉めても紐は解かないからな。行くぞ」
「はーい」

ミリィは俺の横についた。
歩くテンポに合わせて「ラン、ラン」と妙な歌を口ずさんでいる。
案外、ミリィの中身は外見と変わらない年齢なのかもしれない。
この調子でいけば、日暮れ前には街に到着するだろう。

凱歌がこだまする丘にて

壁が怯えている。

森を抜け、ゆるやかに波打つ丘陵の頂上に立ってラインの街を見下ろしたとき、ふと、そんな思いが頭をよぎった。ラインをぐるり取り囲む外壁が、何故か小刻みに揺れているように思えたのだ。

ミリィも俺と同じ違和感を覚えたらしい。右肩から甘ったるい声が聞こえる。

「なんだか……泣いてるみたい……」

実際、壁は振動していた。ラインから１ｋｍは離れているここでも、注意をすれば地面が微妙に揺れているのが感じられる。まるで超局所的な大地震を見ているようだ。

「壮観だな。Ｍｉｄｇａｒｄには最初期から居るが、こんなのは初めてだ」

「ミリィ、ちょっと怖いです。街がぎゅうって潰されちゃいそう」

「ここの話じゃ逆に広がるんだろ？」

俺が言うと、ミリィはきょとんとした表情を浮かべた。

「ほら、あれだよ。お前も知ってるだろ。壁の……あの逸話」

それで合点がいったらしい。ミリィは「ああ」と小さく呟き、首を上下させた。

壁の逸話について、俺からも少し説明しておく。
生前、この世界のあらゆる魔術に精通していた老魔術師ドグィ・ラ・ナ・アンダルシア・ベルローグ（隼斗はドグィ・ナと言っていたがあれは間違いだ）は、ついに主神オーディンから『生命に関する秘術』を享け賜った。有頂天になったドグィ・ラ・ナは年甲斐もなく世界一周旅行なんかをやらかし、Ｍｉｄｇａｒｄの各地に無数の記念碑を遺して、最期は最北の地において「蒸発」した。死因は凍死だとか老衰だとかいわれているが、真相は杳として知れない。なかにはニヴルヘイムに迷い込んだのだと主張しているものも居る。
ラインの人々は言う。
ドグィ・ラ・ナは記念碑を用いて秘術の「実験」をしていたのだ、と。そして、この壁は彼の成果物のうちの一つなのだ、と。
また、こんな噂がある。
『ドグィ・ラ・ナの揺り籠』には魂が宿っている。
Ｍｉｄｇａｒｄにはそれを裏付けるアイテムが存在している。それは「雪解けの朝」と言う名前の本。
この本に限らず、Ｍｉｄｇａｒｄに存在している本は全て購読が可能である。その数は万を超えているといわれ、半数以上は「手引書」、「伝記」、「博物紙」などで占められている。本のなかには魔術を発動させるための呪文が記載されているものもあり、そのため、本は魔術師見習いには必須のアイテムとされている。
さて、問題の「雪解けの朝」だが、これはラインに在住している女性作家が執筆した絵本、という体裁をとっている。あらすじとしては、ある冬の日、心を持った優しい岩が、親とはぐれて凍えている子猫の為に場所を貸してやる、といったもの。澄み渡った冬の星空を、水彩の柔らかなタッチで描かれたページが人気を呼び、今ではラインにおけるメジャーな特産アイテムのひとつとなっている。
巻末のページには作家のコメントがあり、そこで作家は、岩は『揺り籠』をモデルにして云々と語っている。これが「証拠」だ。なんとも頼りない証拠だが、一応運営が製作した書物なので信憑性は

高い。

「……あ？　動いてないか、あれ」

どうやら、隼斗が意識を取り戻したようだ。後ろから野太い声がする。

俺は振り返らずに首肯し、再び進軍を始めた。

「これから門を潜りにいくが、衛兵や傭兵なんかには気を付けとけよ。中は面倒なことになってそうだ」

「まって！　エドが起きたんだったら、これってもう要らないですよね！　ねえ、ルナさんってば！」

「うるさい」

「お、おにばばぁ……」

「なんとでも言え」

ミリィが視界の端っこから右腕をアピールしてくる。邪魔くさい。

道中、ミリィはずっと紐を外そうとがんばっていたが、紐は結局ほどけなかった。

当然だ。紐には束縛の呪文がかけられている。隼斗ならまだしも、非力な小娘のミリィにはほどけないに決まっている。

噛み付くように俺にまとわりつくミリィを無視していたら、隼斗がミリィに加勢をしだした。

「ルナ、やってやれよ。ミリィが可哀そうだよ」

「駄目だ」

「なんでさ」

「……街に着いたら放してやる。それまでは我慢してろ」

我ながら歯切れの悪い返答。隼斗も不審げな表情を隠そうとしない。

だが、正直に「憲兵に突き出すため」と言ったら、隼斗はミリィを逃がしてしまうだろう。それだけは避けたい。

ミリィには最後まで働いてもらう。

門前

岩山を車で爆走したらこうなるだろうか。唸(うな)りをあげて振動する壁の直下は歩くのさえ困難だ。

高さ約２０メートルほどの、鉄扉がギロチン式に閉まる門の手前には誰も居ない。普段なら門の左右に銀の甲冑をした守衛が立っているのだが。一体どこに消えた。

「あれ？　行かねーの？」

「ふぎゃ！？」

俺の右脇を、綱引きで使う縄より一回りほど小さな縄を胴体に巻き付けた隼斗が通過した。俺は無意識のうちに立ち止まってしまっていた。連動して、隼斗のすぐ後ろで「逮捕された犯罪者」ごっこをしていたミリィが隼斗の背中にぶつかった。前を見ないからそうなる。

返事をする代わりに外壁を仰いだ。分厚い石壁は人を乗せたトランポリンのように振動し、チェーンソーに似た音を立てている。

『揺り籠』、ねぇ……。

「中に人いんのかな」

「居たとしたら災難だ。今頃はゲロぶちまけて倒れているだろうな」

「うわぁ。掃除するやつはご愁傷(しゅうしょう)さま」

「そっち心配するのか。軍隊なんてどうせ男しか居ないんだから、掃除しないんじゃね――」

「やめて！」

俺たちの会話にミリィが割り込んできた。

「なんてキタナい話をしてるんですか！　女の子の前だっていうのに……ヒジョウシキです」
「いや俺も女だから」
「あなたはただのオカマ野郎です！！」

それを言うならニューハーフじゃね、というツッコミは胸の奥に仕舞っておいた。ミリィは本気で嫌がっている。

「ああ、次からは気を付けるよ」
「ふんっ！　礼儀知らずっ！」

ミリィは叩きつけるようにそう言うと、門を潜って行ってしまった。否応なしに隼斗がそのあとをついていく。隼斗は何度かこちらを振り返ったが、そのうち前だけを向くようになり、とうとう視界から消えてしまった。
どうすっか。ミリィの件は隼斗がついているから、まあ大丈夫。その後の展開はあいつから聞けばいい。
むしろ問題なのはこっちだ。後ろの初心者、どうしよう。

……面倒だな。
俺は門に背を向け、ＰＣどもに向き直った。

「全員生きてるな。それじゃ、門を過ぎたら解散だ。ここからは自由行動にする」

やはり、奴らは硬直してしまった。歩き出そうとするＰＣは一人も居ない。さすがに二言三言では動いてくれないか。

「こんな所でぼさっとしていても、餓えた野犬に喰われるだけだぞ。それにじき夜になる。活動期に入ったオークなんて、お前らじゃあ

まず倒せない。早くしないと、門も閉じちまうぞ」

これでも、駄目だった。

想像以上。こいつら筋金入りの軟弱者だ。こいつらなら豆腐にだって打ち負ける。

仕方ないので、俺は脇を守っていた６人を呼び寄せ、宿屋『コニャック亭』に向かうよう指示した。

コニャック亭とは、ラインのホテル業、旅館業において圧倒的なシェアを誇る『ワインホテル』の一角だ。まあ、『ワインホテル』というのは俺たちが勝手に付けた俗称で、ワインの産地で有名なフランスの土地を店名に掲げている宿屋を一括した呼び名である。雑談で話題に出されるうちに、いつしかラインの政治を裏で牛耳る巨大な企業連合、という裏設定を付けられた。それぞれの宿屋ごとに性格付けがされ、寸劇を行ってはコミュニティを盛り上げている。

『ワインホテル』は、具体的には『コニャック亭』の他に『ボルドー館』、『ロワーヌ』、『シャンパーニュ』などがある。なかでもコニャック亭は宿泊料が桁違いに安く、行くあてのない貧乏ＰＣの良き溜まり場となっている。

門に吸い込まれていく初心者の集団を見送り、体をくるりと半回転させた。

さて、これからが本番だ。俺たちの前途には、解決しなければいけない問題が無数に横たわっている。Ｍｉｄｇａｒｄからの脱出はさておき、どうにかして、この世界で上手に生きる方法を編み出さなければいけない。でなきゃ死ぬ。

まず食糧。当然、食べ物が無ければ三日と経たずに死んでしまう。懐には少量の薬品があるが、これではとても腹の足しにならない。果たしてラインには料理店などあっただろうか。そんな店が実際あ

ったとして、その売り物は俺たちが食えるような代物なのだろうか。オムライスのプラスチック風味、なんてものを出されても困る。

この世界の衛生環境も知っておかなければいけない。魔法という便利な道具があるから、トイレ周りはそれなりに発達しているはず。しかし、風呂は存在しているか怪しい。体を洗うにしても、シャンプーなんて代物は望めそうにない。まあ風呂くらいなら自作する手もある。街の裏に川があるから、そこで木や石で囲いを作って火を焚けば、多分それっぽいのが出来るだろう。うん。食糧も、川で魚を釣れば良い。最悪モンスターを狩って喰おう。超ゲテモノ料理になるだろうが、まあ、なんでも挑戦あるのみだ。

住居も入手しなければいけない。いくら安いとはいえ宿屋暮らしではジリ貧だ。だからといって、こんなわけのわからない土地で野宿なんてしていられない。だから金が余っているうちに、アパートのような物件を見つけるか、家を買うかしなければいけないな。帰る家を作れりゃ精神的にも安定するだろう。また、キーボードが無くなり、メニュー画面を開けないでいる現状、メニュー画面を経由して表示させる道具欄も開けなくなっている。悔しいが、現状では身に付けている装備以外は“消失”したとみなして良い。今後は獲得した品物を溜めておく場所が必要になってくる。住居の確保はやはり急務だ。

顎(あご)に手を当ててうつむき、悶々と悩んでいたら、突然、右の太股がぎゅうと圧迫された。驚いて真下を見下ろすと、やたら花弁の数が多い彼岸花が目に入った。彼岸花にしては赤色が暗い。

不意に締め付ける力が増した。

そろそろ痛くなってきたので、両手で彼岸花の頭を挟み、ぐいと押した。花は僅かに抵抗を見せたが、すぐに離れた。

案の定、謎の巨大彼岸花の正体は人間だった。身長一メートル前

後のホビットだ。

「……あんたも新人か？」

「う…うぅ……」

あ、泣く。

思わず頭を抑えていた手を離したら、間髪入れずにしがみついてきた。今度は腰の辺りをホールドしやがった。動けねぇ。

結局、赤髪のＰＣは泣いてしまった。俺のローブに顔を埋めて泣きじゃくっている。衣服と洗濯について考えをめぐらしていたところに、これとは。妙な虚脱感をおぼえる。

まったく、今日は女災が続く日だ。

中央通り［ヴァーラ市場］

路上では暴動めいた騒動が繰り広げられている。暴れている者どもはＰＣばかり。

ああ、見苦しい。

「今から食い物を調達しに行くが、腹、減ってるか？」

「……」

前を向いたまま赤髪の少女に問いかける。ぐいとローブがずり下がった。これは肯定の合図だろうか？

結局、赤髪は腰から引き剥がせなかった。

門から街の中央まで続くこの道には、途中、露天のオブジェが連なって配置されている。ここがゲームだった頃、露天商たちは、やたら大きな木枠に様々な果物や野菜を放り込み、通りかかるＰＣたちに定型文を投げつけていた。

雑草だって食えるのだ。露天の食物も食えるようになっているに違いない。

俺は左手を天にかざし、杖を召還した。白い閃光が迸（ほとばし）り、頭上に黒褐色の大杖『クロウ』が現れた。

「街中での帯刀は不可、じゃなかったっけ？」

アクションを起こすたびに確信が深まる。やはり早々に諦めとくべきだな。

杖に魔力を充填し、騒動の中心に狙いを定めた。深呼吸。一拍置いて、呪文を発する。

「エクスプローション！」

杖先からポンと赤い光球が出現した。光球は杖が指す方向へとまっすぐに飛んでいく。夕暮れに紛れながら埃っぽい人混みに接近し、その中に消えた次の瞬間、強烈な閃光と轟音が沸き起こった。

続いて爆風が広がる。喚きあっていた者どもはいっせいに吹き飛ばされ、石畳の地面に叩きつけられた。

後に残るは沈黙のみ。

「あー清々する。そんじゃ行くか」

「……」

呼び掛けたが返事はない。ただ、ローブにかかる重みが増した気がする。腰にコアラをひっつけているみたいだ。

俺は赤髪の挙動にデジャヴを感じている作者（バカ）を置き去りにし、両手で杖を構えながら、ぎこちない足取りで露天のあるほうへと向かった。

これ、いつか転ぶな。

爆発の呪文を唱えたのは失敗だった。

石畳の上は、気を失って倒れた人間約１００名、原型を失い、指サイズの木クズとなって散乱する木材、潰れて中身をグロテスクにぶちまけた食物などで埋め尽くされていて、足の踏み場が無い。

おかしいな。これでも手加減をしたはずなのだが。

食物を拾う妨げになるので、今度こそ赤髪のＰＣをどけなければ

いけない。
　ようは、この子の恐怖を和らげてやればいいわけだ。都合が良いことに今の俺は女性。小学教師にでもなった気でやればいけるような気がする。俺は杖を送還し、ぎこちない笑顔を作りながら下を向いた。

「ちょっと、いいかな。おに……、いや、お姉さん、ここに落ちている果物を拾いたいんだ。少しの間だけ、離れていてくれないかな？」
「うぅ……」
「ねえ、少しだけの我慢よ。大丈夫、お姉さん、絶対に逃げちゃったりしないから」

……穴はどこだ。
　赤髪はローブに顔を押しつけたまま、いやいやと首を振っている。恥ずかしくて死ぬ。誰か助けて。

「それじゃあ自己紹介をしましょう。お姉さんの名前はルナっていうの。あなたの名前は？　好きなものはある？　好きな食べ物は――」
「……」
「こんな遊びがあるのだけれど、あなたは知ってる？　ねえ、見てみて。手をこんな感じに丸めて、一人が順番に指を入れていって。『ずい、ずい、ずっころばーし――』」
「……」

　離れろ。

「……わがままな子は、夜になると消えてしまうらしい、わよ。なんでも夜な夜な幽霊、お化けが、わがままな子を連れ去っていって

しまうらしい。いい加減に言うことを聞かないと、明日にでもお化けがきて、遠くの山に連れ去れてしまうよ」
「や……だぁ……！」
「なら、離しなさい。いい子にしてたら俺が守ってやるから」
「……はい」

赤髪が頷くと、同時に圧迫感が消えた。
体が軽い。ローブの裾を掴んで広げ、傷が浅い果物を選んで放り込んでいく。赤髪はしばらく俺の後ろで立ち尽くしていたが、俺の動作を見て覚えたのか、そのうち手伝うようになった。
果物を拾い終わった頃には、すっかり日が落ちていた。濃い紫色の夜空。
足下で押し殺したうめき声が聞こえた。
赤髪が両手で俺の背中を掴む。どうやら、倒れた奴らの意識が戻りかけているようだ。面倒事に巻き込まれる前に、さっさと退散してしまおう。

アルマ

丸形。花形。釣り鐘形。
道に面している建物に取り付けられた、様々な形をした外灯が、いっせいに点灯した。
光の色は淡いオレンジ色。外見と同じく、それぞれの外灯ごと、色や光度などが微妙に異なっている。
そしてまた、足下が朧気（おぼろげ）に光っている。
小さい頃、太陽の光を受けて発光するアクセサリを自室に飾っていたが、ラインの通りに敷かれた石畳には、それと同じような性質を持った魔石が砂利状に挽かれ、混ぜられている。
アクセサリと比較すると、魔石の光は5、6時間も長く持続する。光量はその日の天気によってころころと変わるが、調子の悪い日であっても、アクセサリとは桁違いに明るい。夏至や、快晴の日が続いた夜など、場合によっては眩しすぎて目を開けられないほどにもなる。おかげで石畳が光の中に埋もれてしまい、かえって危ない。
最近では魔術師を集めて雲を発生させる計画を立てているらしい。街のいたる所に『空読み募集！』のビラが貼られている。まったく、Ｍｉｄｇａｒｄ史上最高に阿呆なイベントだ。魔石が放つ光が邪魔なら魔石の力を弱めればいい。何故わざわざ雲を作る必要がある。

壁はまだ唸（うな）っている。少し酔ってきた。
武具屋の角を西に折れ、湾曲（わんきょく）した、緩やかな坂をのぼりきったところに『コニャック亭』はある。部屋数が多いだけが取り柄の、木材で組まれたボロ屋敷で、正面に置かれた水瓶が目印だ。

段差につまずき、よろけた拍子にローブから赤い実がこぼれ落ちた。赤い実は光の上をバウンドし、雨水を流す為に作られた側溝にずぼりとハマってしまった。
食べられない、と判断するのは贅沢だろうか？
俺はやたらと大きなサクランボに向かって踏み出した。
同時に、赤髪のＰＣが声を上げた。

「あの……」
「……？」
「アルマ、取ります」
「ああ」

言うが早いか、赤髪はとて、と駆けていき、溝から赤い実をとり上げた。アルマの手のひらに収まった赤い実は明らかに形が変わってしまっている。食えるのか、それ。

「ん。どうも」

アルマに近付き、膝立ちになって広げたローブに入れるよう促した。
が、アルマはシャツを脱ぎ、ローブからいくつかの果物を手に取り、赤い実と一緒にくるんで両手に抱えてしまった。
悪寒が背中を蹴りつける。

「持ちます」

……ああ。
なんだ。
盗まれるかと思った。

「よ、よろしく」
「はい」
「……さっき落とした果物、まだ食べられそう？」
「アルマですか？　……半分くらい潰れてて、あと、砂がちょっとだけ付いてます」
「そんくらいなら問題ないかな。悪いね、アルマ。明日にも新しい服を買ってやるよ」
「あり、が……う？　……あっ！」

突然、アルマは大きな声を上げた。かと思うと、笑い出した。

「違います。ふふ、わたしじゃないです」
「ん？」
「こっちが、アルマです」

と、丸まったシャツを指差した。
続いて指を自分のほうに滑らせた。

「フラウレ。わたしは、フラウレです」
「……ああ。勘違い」
「お姉ちゃんったら、この果物と会話をしていたみたいですね」
「どうやらそうらしい」

投げやりに返事をした瞬間、赤い実と手を繋いで商店街を練り歩く、という映像を幻視した。こいつは笑える。
“フラウレ”は俺のアルマ動物説をいたく気に入ったらしく、シャツの中のアルマで遊び始めた。

「ねえ、アルマさん。あなたは私をローブの中に投げ入れちゃった

りするんですか？　アルマさんに似合う服っていったいどんな服なんでしょう？　小人さんみたいな服？　それとも、赤い新しい皮？」

歩きながら、その、たわいのない人形遊びに耳を傾ける。フラウレは一人できゃっきゃと楽しそうだ。さっきまで鼻水垂らして泣いていた人間とは思えない。

まるで子供のようだ。

坂の頂上と空の境目から水瓶の頭がぬうと現れた。

あいつら、無事に部屋を取れただろうか。

コニャック亭

フラウレに扉を開けてもらい、俺はコニャック亭の扉を潜った。
ずんぐりとした体型の亭主がカウンターの向こうで厳(いか)めしい顔を作っている。年齢は五十半ば。木椅子に座り、新聞を片手にして、着古したワイン色の外套を羽織っている。右の手の甲には、人差し指の付け根から手首にかけて、大きな切り傷がある。これは彼が常備軍に編入されていた時にあたえられたものだ。
鈴が揺れてチャリと声を出した。
亭主は俺の姿を認めると円縁の金眼鏡を持ちあげた。

「なんだぁ、嬢ちゃん。今日はまた愉快な格好をしておるな」

喋った……だと……？
おい。いつもの定型文はどうしたんだよ？　ｙとｎの選択肢はどこへいった？
やはりおまえたちはＮＰＣではなくなってしまっているのか？

「そんな、欲張るんでねぇ。嬢ちゃんのちんけな胃袋じゃあ、５個かそこらを喰ったっきりで、あとは全部腐らせっちまうだろうて」

亭主はそう言って、読んでいた新聞を天板に広げた。果物を置けと指示しているようだ。

「い……いや……。それより団体って来てない？」
「団体？　あー。団体ってえと、いましがた冒険者の群れがドカッと入ってきたなあ」
「今は？」
「上の大部屋を貸してやったよ。番号はＣ－２だ。そいつらが嬢ち

ゃんのツレだってんなら、早いとこそれを持って行ってやんな。可哀想に。あいつら、首を曲げられねぇほどにくたびれっちまってたぜ」
「……」
「鍵は渡してある。ノックして入んな」
「どうも」

俺は頭を下げてカウンターの横を通っていった。
奥にすえられた階段の一段目に足をかけたとき、後ろから亭主に呼び止められた。

「待ちなぁ。両腕がふさがってるんじゃノブを……おや？」

振り返ると、亭主とフラウレが目を合わせていた。

「こりゃあ珍しい。ちびのお嬢ちゃん、アンタはヴィーグかい？」
「ヴィーグ……？」
「どっからお越しなさった？　仲間はどうした？」
「わ……わたしは……」

フラウレは返答に窮（きゅう）してしまっている。
質問をしても意味が無いと踏んだのか、亭主は視線を上にそらし、腕を組んでフラウレの髪を注目しはじめた。
なんだ？　欲しいのか？

二人とも、相手をじっと見つめたまま固まってしまった。
そろそろ肩が疲れてきた。俺は段差から足を外し、亭主にたずねた。

「亭主、ヴィーグってなに？」

「……ん？　アンタも知らんのか？」
「ああ」
「ヴィーグってなあ、民族の名称だ。深い森ン中や、荒野の端っこやらに好んで棲(す)んでおるへんちく者でな。こんな、どでかい街ン中じゃあまずお目にかかれねぇ奴らだ。それが子供、しかも女の子が独(ひと)りぽっちってえなると、もはや運命さえ感じちまうよ。……あんたら、本当に人間なんだろうな？」
「……あれ？　フラウレってホビットじゃなかったの？」

疑問が、つい口から漏れてしまった。
そこで亭主の目はようやくフラウレの髪から離れ、俺のほうへと移った。くすんだ青い瞳が大きく見開かれている。
数秒の空白の後、亭主は口を開けて豪快に笑った。

「ハッハッハッ！！　こんなべっぴんな小人(こびと)なんて居るもんかい！あんな『わがまま者』どもと一緒くたにしちゃあ、フラウレちゃんが恐くって泣いっちまうわ」
「お……おお？」
「……悪かったなぁ。俺としたことが、亭主の領分を越えっちまった。すまない。今のやり取りは無しだ。三割引いてやるから、どうかお客さん。間抜けな俺を許しておくれ」

そう言って、亭主は灰墨色の頭をカウンターに押し付けた。
だから、わけがわからねぇって。

「許す。許すからさ。もう上がっていい？」
「ああ。お世辞にも立派な部屋とはいえねえが、まあ、くつろいでいってくれや」
「分かったよ。また一人来るかもしれないから、そん時はよろしく」
「了解だ、お客さん」

亭主は顔を上げ、返事をすると共に右手を挙げた。

これでようやく休める。腕を小刻みに上下させて果物の位置を調整し、階段に向き直った。

後ろからフラウレが「大丈夫？」と声を掛けてきた。俺は黙って頷く。

この程度の段差なら平気だろう。駄目だった時は、それまでだ。

コニャック亭［鷹の間］

二階に上がり、T字の廊下を右に曲がってC－2のドアの前に立つ。首を振って促(うなが)すと、再びフラウレが開けてくれた。

部屋の中は陰気な初心者でぎゅうぎゅう詰め。左右の壁にはそれぞれ六台の二段ベットが設置されているが、初心者は誰もそれを使っておらず、中央に寄り固まっていびつな団子を作っている。息苦しすぎて死にそうだ。

なかには体育座りになって涙をこらえている者もいる。

思わずため息を漏らした。俺はいつまでこいつらと付き合えば良いのだろうか。

「ほら、夕食だよ。せめて窓開けるとかしたらどう？」

呼びかけると、数人がこちらを振り向いた。相変わらず死んだような目をしている。

こんな状態でも腹は減っているらしい。最初の数人が近付いて果物を取り上げると、他の者も次々と立ち上がり、俺のほうへと殺到してきた。ゾンビ、再び。

フラウレが慌てて廊下に出る。中身はさておき、外見は逞(たくま)しい戦士なのだから、小さなフラウレには一層恐ろしいに違いない。

しかし、こいつら、力加減を知らねえ。ローブがぎゅうと押し付けられ、そのあまりの重さに手を離してしまいそうになる。

全員に行き渡った頃には、果物は2個に減っていた。

「だ……大丈夫ですか？」

背後から、フラウレが心配そうに問いかけてきた。

「……ああ。だがローブはちょっと駄目だ。伸びちまった」

まるでカンガルーの袋のように、ローブの腹の辺りがぶよぶよに凹(へこ)んでいる。

捨てるには惜しい。なにせ２５００ノルもした良品だ。これでも毛布の代わりにはなるだろう。

フラウレから例の潰れた果実を貰い、爪を使って皮を剥(は)いで囓(かじ)ってみる。

リンゴとキウイの中間のような歯ごたえ。甘みは少なく、酸味が強い果汁が舌全体に広がっていく。今まで食べたことが無い味だ。強いて挙げるなら、梨にレモン汁を漬(ひた)したような味。

他にも、リンゴによく似た果物と、ミカンに酷似(こくじ)した果物を食べてみたが、どちらも馴(なじ)染んだ味がした。現実世界と違うものは、いまのところ、このアルマという果物だけのようだ。

食事が一段落ついたところで、俺は再びアルマの赤い皮を手に取った。

おかしな話だ。今の今まで、Ｍｉｄｇａｒｄにはアルマという名前のアイテムがあることなど、俺は全く知らなかった。こんなものが存在しているという噂も聞いたことが無い。そもそも、Ｍｉｄｇａｒｄには果物に類するアイテムは存在しない。道端に配置されていたとしても、それはただの置物だ。まさか、置物のひとつひとつに細かな設定を与えていたなんて、そんなことも無いはず。

いや、設定うんぬんはこの際どうでもいい。今、ここで、重要なのは、俺でさえ知らなかった事柄を、フラウレは当然のように知っていたということ。これでも俺は初日から参入した最古参のうちの一人だ。俺にはＭｉｄｇａｒｄのアイテムを全て把握している自負がある。隠しアイテムの取得法や、ダンジョンの構造はもちろん、全てのマップに配置された商人の位置だって覚えている。Ｍｉｄｇ

ａｒｄに俺の知らないアイテムがあるとするなら、それは存在しないアイテムだ。
だが、『アルマ』はげんに存在している。出自不明なうえに用途不明。使用してみても、腹がふくれる以外にパラメーターの変動はない。クエストの褒賞品でも無いようだし、レアアイテムにしては量が多すぎる。
これは一体何なんだ？

いや、だから、問題はそこではない。
フラウレ。
君は何故これを知っている？
君はどこにいる？

「……嫌なら答えないでもいいんだけどさ」

振り返り、リンゴを頬張っているフラウレに訊ねてみる。フラウレは即座に果実から顔を離し、浅い青色の瞳で俺を見上げた。

「フラウレって、いま何年生？」
「なんねんせい？」
「どの端末から接続してる？」
「……あの、ごめんなさい。なんねんせいと、せつぞくっていうのは何ですか？」

マジでしたか。

「……ああ。俺の訊き方が悪かった。ごめん。じゃあ、フラウレはどこ出身で、今は何歳？」
「ハヴィーストから来ました。ナルナ地方の出身です。今年で……たぶん、１０です」

「ラインに来ることになった経緯、言える？」
「……話し辛いです」
「ならいい。少なくともフラウレはこの世界……あー、毎日毎日、どっかの土地で、どうにか頑張って生きてきたってのは、確実だね？」
「はい」
「パソコンなんて道具も知らず、使わず」
「はい。わからないです」
「オーケー、了解した。質問はこれで終わり……と、思ったが、最後にひとつ」

ああ。訊きたくないなあ。

「フラウレには、戻る場所がある？」

俺の質問を訊くなり、フラウレの目の彩度が一気に暗くなった。なんて分かり易い。

「……ない、と、思います……」

彼女の過去には物語になるような悲劇がひしめいているのだろう。うつむき、拳を作る手が僅かに震えている。
ともかく、これでパーティの人数が一人増えたことが確定した。わあい。
しかもこの子はミリィのアホと違って何にもかぶれていない本物の（あるいは架空の）少女。はたして、俺なんかで賄（まかな）い切れるのだろうか。ただでさえ無知な人間が１４人も居るというのに。
本当に、本当に、どうすりゃいいんだ。
俺は軽い礼を言ってから半裸のフラウレにローブを手渡し、いまだに突っ立ったままの初心者を押し分け、近くのベットに倒れ込ん

だ。

三十六計なんとやら。

今日はもう寝てしまおう。

神々を束ねる者

――巨人は生まれながら邪悪であった

赤いドレスを身に纏(まと)った女性が、黄金の王座に腰掛けている男性に語りかけた。

「転送が完了しました」

古ぼけたＡＴＭから発せられる、音声アナウンスのような単調な響き。

「……性格も組み込んでやらなければいけないようだ」

男性は眉間に皺を寄せ、呟いた。

「主人(マスター)。ご心配なさらずとも、事は精確に進んでおります」

「そうではない、ユミル」

ドレスの女性をユミルと呼んだ男性は、他の人々が自分が操作をしていたキャラクターの姿でＭｉｄｇａｒｄに閉じ込められているなか、たった一人だけ、現実のものと全く同じ姿をしている。

見かけの年齢は２０代後半。灰色のスーツ姿の上に黒いコートを

羽織り、大きなとんがり帽子を目深に被っている。中肉中背で、やや猫背の様子。左から右に、耳に掛かる程度の茶髪を流し、先端をはじけるようにばらけさせたその髪型は、針を中途半端に切られたハリネズミのようなおもむきがある。黒く細い眉の下にはめ込まれた瞳は赤錆色（あかさびいろ）に近い黒で、いま、その目は驚喜と興奮のため僅かに充血している。

彼は懐から木製の小杖を取り出すと、ダイヤモンドの手すりを軽く叩いた。

その途端、空間に無数の画面が浮かび上がった。

「……これが『フリズスキャルヴ』の能力か」

画面はＭｉｄｇａｒｄの各地を定点からリアルタイムで映し出している。

しばらくのあいだ、男はいくつかの画面を眺めていたが、不意に上体を起こしてユミルに命令を下した。

「監視カメラのようで興が削がれる。ユミル、投写の方法を変更してくれ」

「了解しました」

ユミルは丁寧にお辞儀をし、おもむろに右手を天に差し出して親指と中指を重ね合わせた。

中指を親指の付け根に振り下ろす動作。

小気味よい、乾いた音が響き渡った。

「……見事なフィンガースナップだが、もう少し穏やかな動作ではいけないのか？」

「検討してみます」

「是非。で、次はどうなった？」

「脳内探知、およびヴァーチャル技術を取り入れました。言語以前の意識野から抽出された情報より投写候補を割り出し、そのうち１乃至（ないし）１００の選択可能な地域を使役者に提示します。選択された地域は１０フィート四方の空間上に立体映像として反映されます。これは現在についてのみに限られますが、選択された地域への擬似的な転送も可能です」
「こちらからの指名には反応してくれるのか？」
「はい。前バージョンの機能は全て備わっております」
「よろしい。……結局、我がＭｉｄｇａｒｄに参入した冒険者は何名となった？」
「最大時でおよそ３６万。現在は２１万３２６４名です。１５：５６時の急激な減少以降、緩やかな減少傾向にあります」
「だいぶ減ったようだな。その原因は何だ？」
「殆どが戦死とおもわれます。その他には落下死、自死などがあります」
「……これから始まる一大イベントを味わえずに退場してしまうとは、まったく可哀想な奴らだ。まったく、本当に……」

と、男性はこみ上げてくる衝動に突き動かされ、勢いよく立ち上がった。そのため、帽子が頭から離れてしまった。
しばらくの間、その場に立ち尽くし、苦しそうに目をつぶっていた。が、男性は弾けるように両腕を広げ、口を開いた。

「――ようこそ！！」

彼の空洞から、ものすごい大声が飛び出してきた。

「ようこそ皆の衆！！　我が絢爛（けんらん）たる世界！　我が惨憺（さんたん）たる世界へ！　貴様等には褒美に現実（リアル）を与えてやろう！　ああ！　『Ｍｉｄｇａｒｄ』よ！　我が聡明（そうめい）な義子よ！　愛している！　愛しているぞ

！！　手繰(たぐ)りよせ掴みあげ握りしめ捻(ねじ)りあげ崩れ壊れ息絶えるまで強く強くこの腕に抱き締めていたいおまえは蒼穹(そうきゅう)の牢獄(ろうごく)！　無辺の監獄(かんごく)！　冷酷(れいこく)な天国！　陰惨(いんさん)な楽園！　おまえは――」

「血圧、心拍数増加。脈拍に乱れあり。顔面紅潮。四肢痙攣(ししけいれん)。精神異常。……危険です」

倒れんばかりに身体をのけぞらせ、両腕を広げたまま全力で叫び続ける男性の隣に立っていたユミルは、彼の背後に忍び寄り、その肩に触れた。

瞬間、男性が直立の姿勢を保ったままビクリと飛び上がった。

ピンと伸びた足が地面に付いた頃には、男性は白目をむいて気を失っていた。

「……電気ショックを施しました。初めてゆえ、粗漏(そろう)が無ければ良いのですが」

まるで人形のように、赤い絨毯(じゅうたん)の上に転がった男性は、口から白い泡を吹いている。

陽気な暇人の集い

真夜中。

宿屋『ボルドー館』の地下に作られた酒場は今日も繁盛している。着ぶくれをした冬の蓑虫(みのむし)のように、天井にぶら下がった蜂蜜色の灯りが、埃(ほこり)っぽい暗がりをおぼろげに照らし、人々にぬくもりを与えている。肉体労働者が多い他の酒場に比べて、歴史深いボルドー館の酒場に入り浸っている人々は、落ち着いた、貴族めいた雰囲気を漂わせている。

そうはいっても、しょせんは酒場である。路地裏にひっそりと佇(たたず)んでいるバーのような静謐(せいひつ)な空気は望むべくもない。談笑の声はやたら大きすぎ、酒を飲む口はいつでも全開。酔いが回り、たがが外れ、狼藉(ろうぜき)を働いて店主から地上に放り出されることもしばしば。

夜もいよいよ深まり、素面(しらふ)の者は地上に退散した。彼らは赤い顔を突き合わせ、泡を残したジョッキを片手に、夕方に起きた壁の異変についてわいわいと語り合っている。

「やっぱりただの故障なんじゃないかな」

と、そこへ、階段の下から四段目、新しく張り替えられた板の上に腰をおろしている少年が叫んだ。

その声を受けて、彼の仲間たちが口々に言葉を返した。

「らしくない、アラン。座れないからってふてくれているのか？」

「僕らだってなにも本気で言っているわけじゃないよ」

「そう！　だからこそ、こうやって楽しく話せているってわけさ。敵襲(てきしゅう)？　内乱？　勘弁(かんべん)してくれ！」

さらにそこへ、カウンター席に座っている二人組の男のうち、背の高いほうが割り込んできた。

「おい、その台詞は騎士としてどうなんた、セベック」

筋肉質のゆったりと太い首が真横にねじ曲がり、無精髭を生やした、精悍な顔が若者たちに露わになった。彫りの深い顔に埋まった瞳は、男の強い意志をあらわしている。

「“汝愛するを護れ”……俺は俺の命が一番愛しいっす！」

「上官相手にそこまでほざけりゃ上等だ。その勇気は買ってやる」

「無分別、の間違いじゃなくて？」

と、二人組の背の低いほうも会話に加わった。こちらは筋肉などまるでないような細い肉体を持ち、顔は少年と見間違えるほどの童顔。頭の上から爪先まで対照的な二人は、そのため、非常に馬が合っていた。

「細かい区別などしていられるか。たとえ豚だろうが、とにかく臆病でなければ上等だ」

「がさつだなぁ」

「がさつで結構！　生真面目や几帳面なんてただ生き辛いだけでさ。走って逃げて、追って斬る！　これだけ出来ればなんでも上等！……そりゃあ、植字屋さんには、こんな単純なのは我慢ならねえかもしれないですが」

「僕らだって、検閲さえなければ今ごろはもっと単純に生きていただろうよ。特に近頃のやつらはうるさいったらないよ。昨日だって、また新しい憲兵が唾を飛ばしにやって来た。彼らはああやって僕の家を乗っ取る気なんだ。このまま検閲が続いたら、いずれ白紙の本を出版することになっちゃいそうだよ」

「インク代が浮いて良いじゃないですか」
「ついでに僕の生活費もね」
「……いや、なに。ここ数日、東の動静が妙なんだ。我々が情報を掴むまでは我慢してくれ」

背の高い男は弁解のつもりで言ったのだろう。その口調にはいくぶん頼りなさがにじんでいる。
だが、その言葉は相方の堪忍袋（かんにんぶくろ）の緒をぶちりと切り落としてしまった。

「……ッ！　待って！　それはちょっと酷すぎるよ！　だって、それじゃ、君たちは権力を振り回して、僕の机から全ての情報を盗んでいったってことだろう！？　ご親切にも？印のサインまで残して！」
「まずい。すまん。口が滑った」
「答えろ、ヴァルター！　この大犯罪の発案者は誰だ！？」
「う、お……お、おかしいぞ。目眩がする。頭が痛いな。おや吐き気もする。君が騒ぐものだから、急に酔いが回ってきたらしい。手洗いで吐いてくるからここで待っていて――」
「ヴァルター！」

顔をくしゃくしゃにして、ヴァルターは腰を浮かしかけた。が、相方に服を掴まれ、椅子に引き戻されてしまった。

「……見逃して欲しい」
「いいや許さないよ。今夜は空が白むまで、たっぷりと語り合おうじゃあないか。セベック君、きみも一緒にどうだい」
「うわ！　俺も居てていいんですか？　喜んでお供します！」
「ラ、ライヒェ……。なぜ、こいつまで……」
「証言には立会人が必要だろう？　君たちは、僕の仕事、僕の情報、

僕の信用、僕の秘密を、ことごとくぶち壊していったんだ。それなりの対価は払ってもらわないとね。ほら、もう一杯頼もうよ。夜はまだまだたんとある」

すかさず、タイミングを見計らっていた店主が二人のジョッキにビールを注ぎ足していく。ヴァルターは元気に跳ねる泡を眺め、弱々しいため息をついた。

一方、アランたち若者のグループは壁についての議論に熱中している。階段でヤケクソになっていたアランも、今は適当な椅子を見つけて机の一角に体を落ち着けている。

原因としては、敵襲（てきしゅう）が主に挙げられていたが、なかでもデニスの主張はいちだん突飛だった。彼は午後四時から七時半の間、大陸が時速３０ｋｍの速度で北西に移動したと言ってはばからない。夕方、昼寝から目覚めたとき、枕元に置いてあった眼鏡が南東の方角にある玄関まで移動していた、というのが彼の根拠だ。仲間は面白い冗談だと笑うが、デニスは頑（かたく）なに主張をまげようとしない。

デニス自身、初めは冗談のつもりだった。が、妙に結論を引き延ばしてしまったせいで引くに引けなくなってしまった。

口論は次第に熱を帯び始める。彼らは『壁』の話題をひとまず脇に置いて、大陸移動説について語り合うことにした。

デニスが口火を切る。

「みんな、狂人を見たように笑っているが、最近の学会じゃあ大陸移動説が主流なんだぞ。かの偉大なる物理学者マニエルによれば、僕たちが立っているこの大地『ガルーア』は、一年で約７センチずつ北西に移動しているというのだ」

すかさずアランが混ぜ返す。

「可哀想に、君はとうとう頭までボケてしまったみたいだ。僕たちの居る世界はぶ厚い大地でぐるりと繋がっているのに、これ以上どうやって身動きしようっていうのさ。にょっきりと足を生やして歩くとでも？」

「俺はアランに首肯。大陸が動くなど、にわかには信じられない。逆に、海のほうが毎年七センチずつ南東に移動しているのでは？なんでも固体よりは液体のほうが動きやすい」

と、アランの隣に座る男が賛同した。

これはアランにとっても不意打ちな出来事だったらしく、彼は半開きの目をせいいっぱい広げて、男を見つめた。彼は旧（ふる）い友人のルドヴィグだった。

実のところ、暇潰しに読んだ雑誌の片隅に名前が載っていたというだけで、デニスはマニエルのことなど殆ど何も知らない。しかも、その時のマニエルの肩書きは料理人である。

「……ところが、大陸は実際動いている。マニエルは論文でこう主張している。“かつて大陸は一つだった”、と。眼鏡の一人歩きから着想を得た僕と違って、彼は地球儀を眺めていたら、ふと、“それ以前”の姿――すなわち、大陸が動くものと仮定して、それらが動き出す前の姿――を幻視したそうだ。そこで彼はとある実験をした。ようは簡単なパズルさ。マニエルは、こう、ガルーアやらイェルパやらを地球儀から切り抜いて、その東端と西端、北端と南端をつなぎ合わせてみたんだ。するとどうだい。それぞれの凹凸（おうとつ）が、恐いほどぴったりとおさまるじゃないか。彼は歓喜したよ。その日はワインを五本開けたっていうんだから、彼の喜びようはきっと尋常（じんじょう）じゃなかっただろう。そう。そうだとも。ガルーア、イェルパ、エイジアなどの諸大陸は、同じ一つの超大陸から、気の遠くなるような年月をかけて、ゆっくりと分散していったのだ」

そんなわけだから、デニスが語るマニエルの話はまったくのでたらめだ。だが、意気揚々と嘘を並べていくデニスはどこか誇らしげだ。

その話がでたらめとも知らず、万年学生の男、ロニーは自分の手記に走り書きを残した。そのうえ、彼はデニスに疑問を投げかけもした。

「実に興味深い話だ。が、やはりそれは単なる偶然だったのではないだろうか？　なんと言ったかな。あの、ロンゴメリアの魔石。……結晶構造、だったか。ふん。別に名前はどうだっていい。あそこで採掘された魔石はみな綺麗な六角柱になると聞いたぞ。とにかく、そうした奇妙な一致は自然界にはよくある話だ」

「それを言われちゃたまらないや。偶然は論理の天敵だ」

「偶然から発見されるものもある」

「どちらにせよ厄介な奴には変わらない。不穏分子は極力のけておきたいね」

「その厄介を手込めにするのが学者だと思っていたが、違うのか」

「少なくとも僕は違う」

「そうか。で、あるなら、デニスはきっと大成するだろう。天才というものはいつでも少数派なのだから」

「嬉しいねえ、ロニー。実は僕も自分は素晴らしい才能を持っているんじゃないかって思っていたところだよ。やっぱり僕は天才なんだな」

「どうやら、俺は己の手で天才を掘り出したらしいぞ。俺は幸せ者だ」

「……セベックが消えた」

唐突に、アランが別の話を持ってきた。

彼は大陸の話に飽きたらしい。真っ赤に上気した顔をあちこちに

向けてセベックを探している。

同じ頃、とうのセベックはヴァルターとライヒェの間に挟まれて、真っ青な顔をした上官をおちょくるのに夢中になっていた。アランが座っている位置では、セベックはちょうどヴァルターの影に隠れてしまって見えないでいる。

首を回しているうちに目が回ったらしい。アランは一度、体を時計回りにぐらりと動かし、大きな音を立てて床にひっくり返った。机からは離れていたので食器を巻き添えにするようなことはなかったが、その衝撃のため、まわりに爆笑が起こり、図らずも大陸の話はどこかへ吹き飛んでいった。

アランはよたよたとはい上がり、床にえずきかける。

「ぶちまけるなら便所」

「ルドヴィグ、薄情」

もはや口を開くことも困難らしい。アランは千鳥足になり、ルドヴィグに促(うなが)されるまま、階段奥の手洗いに駆け込んだ。

「しかし解せないな」

他の皆が反射的に立ち上がったなか、ひとり椅子に深々と座り続けたロニーが呟いた。

「どうして『壁』が動いたのだろう。セベックではないが、これが不吉な予兆などでなければ良いのだが……」

その後、仲間たちはけろりとしたアランを迎え、再び『壁』の話に花を咲かせた。途中、『冒険者』の話題も上った。が、この二つ

のグループは行動範囲がまるきりずれているので、ちょっとした噂話以上に話が拡がることはなかった。

彼らはまだ、この世界に起こった異変について、何も知らない。

彼の住処

エイジア大陸の東端には巨大な湖がある。
面積はおよそ７００００?。ダルマのように南側が丸く膨らんでいて、中央に窪(くぼ)みが入った形をしている。湖畔の様子は、北は断崖絶壁が多く、南は白い砂地が広がっている。
ときおり強い風が吹き、水面を波立たせるが、気候は一年を通して穏やかで、気温も人が暮らすには丁度良い。水質は上々。水中では魚が豊かな生態系を築いている。森には果実を実らせる樹木があるなど、食物にも困らない。
それにもかかわらず、この巨大湖の周辺には街どころか小さな村一つ無い。
山脈を隔(へだ)てた僻地(へきち)にある、というのも大きいが、人が知性を獲得する以前より、その素晴らしい快適さのために動物や魔物が熾烈(しれつ)な縄張り争いを繰り広げており、いまさらその渦中(かちゅう)に埋(うず)まることができないでいる、というのが大きい。エイジアの人々はこの湖を『ヘルの庭』と呼んでいる。

ゲーム『Ｍｉｄｇａｒｄ』はガルーア大陸が舞台となっているが、本筋には関わらないおまけ要素として、この湖の一部が開放されている。湖へは西の王都『ラゼトール』の転送施設を使って行ける。
モンスターの脅威度をあらわす星の数は最高の６。ラストステージより敵が強いといわれており、初級者はおろか、ルナのような上級者でさえ、悪いときにはものの数分でゲームオーバーにされてしまう。
そのぶん多くの貴重な素材の採集が可能で、また、廃人の手にかかれば、そのモンスターさえ狩猟の対象になる。上級者は言わずもがな、素材集めだけなら戦闘をする必要が無いので、逃げ回り、ＰＣとモンスターが戦っている間に素材の採集をする初級者もまた多

い。

剣を振り、巨大狼の脇腹を切り裂いた瞬間、シエラは身震いをして剣を放り投げた。

「うっ……ひゃっ！？」

あまりにも生々しい感覚。彼女は右手を中途半端に広げ、呆然とした表情で狼を見つめた。

狼の焦げ茶の体毛が赤く濡れている。

狼は痛みにうめき、数歩飛び退いて後退をした。そこへ仲間のジャックが追い打ちをかけた。

「うなれ氷鎗（ひょうそう）！」

彼の頭上に長さ1メートルほどのつららが生成された。つららは先端を頭にして狼のもとへと飛んでいく。

狼は更に跳躍（ちょうやく）をして後退し、間一髪のところでつららを避けた。

勝てないと悟ったのか、狼は湖を背に、森のあるほうへと走り去っていく。ジャックは二発目の準備をしていたが、狼は彼が魔法を発動する前に射程から脱出してしまった。

「逃げやがったか」

ジャックは手にしていた本を閉じ、送還した。途中まで生成されていた氷柱が魔力を失って崩壊する。

シエラはまだ混乱している。捨てた剣を拾うこともせず、右手を握ったり、広げたり、頬をつねってみたりしている。
見かねたジャックが声をかけた。
「夢じゃないけど？」
「……やっぱり？」
我に返ったシエラが返事をする。
「あたしのヘッドギアがなくなっちゃったみたい。いわゆる閉じ込められ系ってやつ？」
「なに？　ロール？　デンパ？　ちょっと恐いんだけど」
「人が弱気になっているっていうのにヒドいねぇ。……ジャックは画面開ける？」
「画面……？」
シエラに聞かれて、ジャックは瞬時にメニュー画面を思い描いた。
メニューよ出ろ、と、無言でとなえる。
「……え？」
反応無し。
「……どういうことだ？」
「そういうことなんじゃない？　自分の服とか触ってみなよ」
「すげぇ」
ジャックは自分が着ていた毛皮のコートに触れ、歓声をあげた。
獅子皮をなめされた黄土色の裏地が指の先をころころとくすぐる。
現実では十万は軽く越えてしまうほどの品だ。

「マジでここに居るって感じじゃん」
「本当に居るみたいよ」
「マジ？」
「まじまじ」
「……すげぇ」
「うん？」
「それじゃあずっと素材集めが出来るじゃん！　やった」
「……まだ、ゲームする気なんだ」

ジャックが飛び跳ねる。シエラは呆れて肩を落とし、捨てた剣のあるほうへと向かっていった。
剣は崖っぷちの危ういところに転がっていた。手を伸ばして拾い上げる直前、シエラは崖の先に広がる湖にふいと目をやり、絶句した。
普段は美しい水平線が眺められる宏大な湖には、いま、壮麗な城が浮かんでいた。１０、２０と突き出された尖塔は天をつくほどに高く、鋭い。城を囲む城壁もまた高く、湖からくみ上げた水を滴らせて大きな滝を作っている。壁の下には庭園が見え、そこにバラの茂みが植えられていた。

「きっ……昨日まで、なにも……」

固まったまま動かないシエラを不安に思い、ジャックが早足でシエラに近付く。そして、ジャックも湖の様子を目の当たりにした。

「でっけぇ……」

二人はその場で立ち尽くし、棒立ちになったまま、しばらく湖上の城を眺め続けた。

それと同じ頃、ユミルは小さな白い画面を呼び出して文章を作成していた。
彼女は機械的な作業は得意なのだが、こうした、感情に依(よ)る作業は大の不得意だった。文章が生成されては添削され、放棄されては書き直されていく。
本来、このような作業は“帽子の男”の領分なのだが、現在、男は絨毯(じゅうたん)の上でノびている。そして男が予定し、ユミルに打ち明けた計画の予定も差し迫ってきている。文章が流れる速度は次第に増していく。
Ｍｉｄｇａｒｄの総人口は８７００万。ユミルはこの８７００万の全てに意図が伝わる文章を作り上げようとしていた。
書いては直し、直しては消す。そして再び書き始める。文章が流れる速度は増していく。
午後の空は次第に暮れ始め、ついに夜が来た。ユミルは文章を書き続けている。
男の手がぴくりと動いた。続いて片眼がうっすらと開き、まもなくもう片方の目も開いた。
男はしばらく寝転がり、天井をぼんやりと眺めていたが、状況を思い出したのか、がばりと起き上がった。

「……ユミル。何時だ」
「２１：２３。予定より２３分遅れています」

そう言って、ユミルが見つめている画面は黒い。文章は、もはや“流れる”と表現する速度を超えてしまっていた。

「“おめでとうございます。あなたはＭｉｄｇａｒｄに選ばれました。冒険者のみなさまは『ウドガルド』にお集まりください。『ヘルの庭』にてお待ちしております。”……これでいい」
「了解しました」
「伝達方法は……そうだな。凝ることもないだろう。メールで良い。ついでにしばらくメニューを使わせてやろう。当然、ログアウトは不可能だが」
「完了しました。……期間は？」
「今日が終わるまで。その後は武器召還以外のシステムを全て破棄するように」
「私たちはいかがなさいますか？」
「俺も対象に入れろ。だが、お前はデバッグだ。つまり現状維持だな」
「了解しました」

ユミルは右腕を上げる。指を重ね合わせる直前、男は声をあげた。

「……いや、待て」
「はい」
「お前は自身に肉体を与えろ」
「それでは、任務の遂行に重大な支障が起こる可能性が」
「構わない」
「ですが――」
「やれ。命令だ」
「……了解しました」

ユミルは両手をヘソのあたりで重ね、丁寧にお辞儀をした。その後、再び腕を振り上げた。
その間に男は立ち上がった。ぐるりと首を回して帽子を探す。帽

子を拾った後、男は黄金の玉座『フリズスキャルヴ』に座り直した。
「空腹でたまらない。なにか、近郊の食材を使って料理を出してくれ」
「アユの燻製（くんせい）とリンゴの果実酒をお持ちしました」
男が要求をすると、すぐさまユミルは両手を上向きにした。
ポン、という音と共に白い煙があがり、彼女の手の上に皿に乗った料理が現れた。
「……。それも、無しだ。北の隅に料理場を設ける。次からはそこで調理をするように」
「了解しました」
「食材も自力で……。いや、システムを使わず……。いや……」
男はユミルに何かを言いつけようとしたが、言葉に詰まって沈黙する。
「主人（マスター）？」
「……そうだな。お前の肉体に依（よ）らず、魔力を消費しない能力を、これからは『基幹システム』と呼ぼう。今後は基幹システムの力を使わずに食材の調達をしろ。人手が足りない場合はＰＣを使え」
「了解しました」
「そして今は獣肉を食（く）いたい気分だ。行け」
「はい」
ユミルは深々とお辞儀をする。
体をくるりと反転させ、右手で大きな円を描いた。すると、円の中の空間がフッと消え、代わりに大きな梢が立ち並ぶ、真っ暗な森が現れた。ユミルは躊躇（ちゅうちょ）無くその中に飛び込んでいく。ユミルの体

が円の中に完全に入ったと同時にその景色は消え、部屋の空間は元に戻った。
赤い絨毯の先にある、金で飾られた豪奢（ごうしゃ）な扉から出ていくものと思い込んでいた男は、拍子抜けをしたように息を吐き出した。料理を脇に置き、帽子を脱ぐ。

「あれは、魔法だ、な……」

それでも釈然（しゃくぜん）としないのか、男は髪の毛をくしゃくしゃといたぶった。
２０分後、ユミルは猪肉のソテーを手にして扉の向こうから戻ってきた。男は無言でそれを受け取った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5806w/

Midgard

2011年12月11日13時51分発行